
雷氷の悪魔祓い

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雷氷の悪魔被い

【Nコード】

N7417Z

【作者名】

ハル

【あらすじ】

非日常を望んでいた高校一年生の高橋雷斗は、夜中に謎の女の子の氷華に出会い、悪魔と契約させられてしまう。氷華に振り回されながらも、悪魔被いと青春の学生生活の両立を目指して頑張る話です。予定ではファンタジーと学園の複合型のようなものを目指します。最後に、文章が下手くそで読みにくいかもしれませんが、ご了承ください。

運命の出会い

「やっぱり、こういう非日常って懂れるよなあ」
ベッドに寝転がりながら、漫画を読み進める。

「って、勉強の休憩で漫画読み始めたら、もう5冊も読み返してしまった。明日の小テストどうしようかなあ……、まっいつか」

ハッと気づくがもう遅い。

もうそろそろいつもなら寝る時間なので、寝てしまおう。
と思い、ベッドに入ろうとした時だった……。

ドーン

「な、何だ!？」

大きな音に驚いて、辺りを見渡してみるも、何もない。

「かなりデカイ爆発音みたいなのが聞こえた気がしたんだけどなあ」
少し気になりながらも、眠ることにした。

ドゴーン

「やっぱり、何かある……よな」

二回も音を聞いたので、聞き間違いではないと確信する。

とりあえず外をしてみるか。

と思い、窓から外の様子を確認する。

「喧嘩…にしちゃやりすぎだよな」

家の前は公園になっているが、その公園で女の子と男が刀を持って喧嘩していた。

「警察に通報…いや、止めに行った方がいいかな」
念のために金属バットを持って行く。

夜の0時を回っていたので、家族は寝ていて、すんなり脱走でした。

「おい、何してるんだ」

女の子と男が俺の声に反応して、俺の方を見る。

「えっ、もしかして見えてるって言うの？」

女の子は癖のない肩まで伸びた茶色の髪に、大きく開いた翡翠色の目、さらにそれらを引き立てるかなり整った容姿が特徴的だった。ただ…胸がないのが残念だ。

女の子は俺のことを見るなり、驚愕の表情になる。
それとは逆に男は口元を吊り上げて、不気味な笑みを浮かべる。

「あぶない、逃げて！」

女の子の声に反応するが、男は一瞬で俺の目の前まで詰めていた。

「なっ！？」

分かった時にはもう遅い。

殺される

そう思い、無意識に眼を閉じる。

自分に何かがかかるのを感じる。

だが、自分の体に痛みは全くない。

恐る恐る眼を開き、何が起こったのかを理解する。

女の子が俺を庇って斬られたのだ。

「な、んで？」

「勝手に…体が動いちゃ…ったのよ。それ…より、逃…げて」

所々途切れながらも、女の子は確実に伝える。

「バカヤロー、俺の代わりにやられた女の子を見捨てて逃げられるかよ」

「な…によ、それ。でも…、いいわ。…あ…んたが…戦い…なさい」

「分かった。でも、どうすればいい？」

女の子がニヤツと軽く笑うが、そんなのは気にならない。目の前で女の子が死に掛けているんだから。

「フェル…時間…かせいで」

『わかった』

女の子が持っていた刀が輝き、光の粒子が集まって、犬のような姿になる。
散々驚きすぎて感覚が麻痺しているのか、俺はほとんど驚かなくなっていた。

フェルと呼ばれた犬はまっすぐ男に向かっていき、その周囲の温度が下がる。

男はフェルを殺そうと斬りかかるが、全て紙一重でかわされる。

「じゃあ、…今から…召喚の…儀式を…するわ」

「召喚？ いったい何を召喚するんだ？」

「悪魔よ」

その言葉を聞き、俺は言葉が出なかった。

宗教とかそんなものだろうと思ったが、この女の子が死に掛けの状況で冗談が言えるほど、愉快的性格をしているようにも見えないのだ。

「そんなもの…どこから召喚するんだ？」

「…ことは別の悪魔の世界。なら、さっさと始めるわよ」

女の子の声が突然途切れ途切れから、ハッキリしたものになる。
そこに多少の違和感を感じたが、今の状況ではどうでもいいことだろう。実際に目の前の女の子は血だらけなのだから。

「分かった」

自分で思うが、どうしてこうなったのだろう。
自分が非日常を望んだからだろうか。

そうであつたなら取り消したい。

面倒なことに巻き込まれて死ぬのは嫌だ。

でも、自分を庇って傷ついたこの子を今守れるだけの力は欲しい。

『我、世界を繋ぐ者。汝、我が呼びかけに答え、世界を渡れ』

女の子の目の前に光の粒子が現れ、一つに収束していく。

俺と女の子の目の前に現れたのは白い猫だった。

『俺を呼んだのは、お前か？』

「はい。でも、契約するのはコッチです」

女の子が俺を指差し、猫も俺の方を見る。

『何のために力を望む』

「…今、護れるだけの力が欲しい」

俺がそう言つと、猫は軽く笑う。

『面白そうな奴だ。暇つぶしに契約してやる。右手を出せ』

恐る恐るながらも、言われた通りに右手を出す。

「おわっ！」

猫が再び光の粒子になり、それが右手の中指に収束し、光が収まればそこには金色の指輪がはまっていた。

「な、何で指輪が」

『これで契約は完了した。じゃあ、また変化するからな』

「えっ!？」

聞き返した時にはすでに遅く、指輪がまた光り、細長い形になり、それを掴むと刀身が銀色の美しい刀になっていた。

「もうツツコミはやめるから聞くけど、次はどうしたらいいの？」

『俺は悪魔だからな。人間の感情、想いを食って力にする。お前の怒りや、恐怖と言った感情、誰かを護りたいといった強い想いを込めてみる。そしたら自ずと反応する』

言われた通りに、想いを込める。

自分を護って傷ついた女の子を護りたいと思う強い想いを。

バチバチ

刀身に雷が走る。

「うおっ！」

突然のことだったので、声を上げて驚いてしまう。

『小さな動作は俺がアシストしてやるから、叩きつぶしてこい』

「分かった」

フェルと男が戦っているところまで一気に駆けていく。

「フェル、戻って！」

『了解』

女の子が右手を突き出すと、少し距離があったが、フェルが粒子になり、女の子の指に銀色の指輪として収まる。

「おーりゃあ」

剣道とかの心得はないので、刀を振っても完全な我流だ。
我流ゆえに相手にかわされてしまう。

『想いを込めて、『雷閃』って叫べ』

「くっそっ、『雷閃』」

横に振った刀はまたしても男に当たることはない。

だが、先ほどとは違う結果があった。

刀の軌道上から雷の斬撃が飛び出し、男は持っていた刀で防御しようとするが、その防御を通り抜けて、その胴体を真っ二つにしてみよう。

「お、俺、人、殺しちゃった」
予想外の結果に慌ててしまう。

男は俺を殺そうとしてた。

殺さなかったら殺されてたかもしれない。

でも、殺すことを前提にした攻撃をするのと、殺さないと思って攻撃して結果殺したのでは、精神的にずいぶん違う。

「やったのね」

女の子が俺の方へ駆け寄ってくる。

だが、さっきと少し違う。

「あつ、怪我が無くなってる」

「ああ、それならもう治療したから大丈夫」

いったい何のために戦っていたのだろう。

「じゃあ、怪我もないなら、俺はもう帰るから」

じゃあ、と言って立ち去ろうとする。

「ちょっと待った!」

「な、何？」

嫌な予感がしたので、恐る恐る聞いてみると、やはり嫌な予感的中していた。

「あんた、あたしのパートナーにならない？」

「はあ！？」

俺の意識はそこで途切れてしまうのだった。

最後に思ったことは、何だ夢か。だ。

だが、今日と言う日がこれからの運命を変えてしまったことには、まだこのときは知る由もなかった。

運命の出会い（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

転校生

「やっぱり夢か」

俺はベッドから起きると共に、大きく伸びをすると、思いがけない声がかけられる。

『やっと起きたか。そういや自己紹介がまだだったな。俺はペンケレ。お前は？』

「じゃあ長いからペケな。俺は高橋^{たかはし}雷斗。ってか、何でいんの？」
ペケは一瞬呆れ顔になりながらも続ける。

『まあ好きに呼べばいい。俺はライトって呼ぶからな。何で居るかって、そりゃ、契約したからに決まってるだろ』

「やっぱり夢じゃなかったんだな」

『まあ、俺がここにるのが証明だしな』

何か目の前にいる猫に偉そうにされると、イラッとくるなあ。

「何で指輪じゃないんだ？」

『戦う時はイメージ通りの武器になるし、人が多いところでは指輪、人がいなかったら、この姿になるからよろしくな』

「何か…悪魔って自由だな」

ペケは、何も分かってないのかとも言いたげな目で俺を見てくる。

俺は悪魔じゃないんだから、知る由もないだろうに。

『いいか、悪魔つてのは我慢することがない。言わば、欲に忠実に生きてるんだ。何故自由なのかって聞くのは、太陽つて何故東から昇るのかぐらい常識だぞ』

「ああ、それは…悪かった」

『分かればいいんだよ。それより腹減ったから、何かくれよ』

「俺も腹減ったけど、キャットフードとか無えしなあ。ペケは好きな食べ物とかあるのか？」

ペケは考えるような仕草をしてから、思いついたように答える。

『ウインナー。あと俺は猫じゃない、虎だ』

「おいペケ、魚と思わせての、猫がウインナーつてのは百歩譲って良ししよう。だが、虎と言うには無理があるぞ」

『俺はホワイトタイガーがモデルだ！デカいと不便だから、小さくしたんだよ』

俺は信じられないと言いたげな視線をペケに送り続ける。

『もういい。とりあえずウインナーくれよ』

「分かったから、機嫌直せよ」

『ふん』

『ここが学校か』

ペケは指輪になっているので、頭の中に直接語りかけてくる。

「猫になったらペケは追い出されるから、絶対そのままでいろよ」

『うむ、あえてやってみたい気がするぞ』

「絶対、猫になんなよ」

『それは振りか?』

「ちげえーよ!」

1人で喋ってるからか、廊下を歩いてる他の生徒から避けられていた。

「お前のせいだからな。今日はウィンナー抜きだな」

『それは勘弁してくれ!』

ペケの必死の願いに、つい許してしまった。

「では、突然だが今日は転校生の紹介をする」

ふーん、転校生とか関係ないな。

どうせ、喋る気ないし。

挨拶もスルーだな。

「高橋氷華です。そこにいる、雷斗の従兄妹です。よろしく願います」

ガタン

「おーい、高橋大丈夫か？」

あまりの不意打ちに驚きすぎて、椅子から転けてしまった。

こんなの、今時じゃ『新婚さんいらっしやい』でしか見れないぞ。

「あつ、はい。大丈夫です」

言いながら、氷華と名乗った女の子を見ると、全てを思い出す。

あつ、記憶喪失設定とかなかったからね？

昨日、公園で会って、俺を非日常に連れ込んだ張本人だった。

「雷斗、昨日はありがとね。いろいろと」

含みある笑顔で言う氷華から、一瞬で俺にクラス中の視線が刺さる。主に男子は、このままじゃ視線だけでなく、別の金属体で刺されそ

うな気もする。

「転校生のあの子と、どういう関係か、嘘偽りなく正直に答える。場合によっては…分かってるな？」

話しかけてきたのは、後ろの席の重吾だ。席が前後なので仲良くなつた。

「別に、どんな関係でもない」

はずだ。俺の記憶の中では、何もなかった。

「雷斗はそんなこと言うんだ。あたし達、一生共に寄り添う仲じゃない。昨日の夜は遊びだったの!？」

女子がコソコソと話し始め、男子はよく分からない言葉を叫んでから、視線だけで人が殺せそうぐらい睨んでくる。

「なっ!？俺はそんなこと知らねえぞ」

「知らないって……、あの子はどうなるって言つの？まだあんなに小さいのに……」

クラスからの視線が先ほどよりも厳しくなる。

今の心境だけで自殺ものだな。

「冗談よ」

軽く笑いながら氷華は言うが、俺の中では冗談のレベルを越えていた。

できれば二度と関わりたくない。

「でも、従兄妹ってのは本当。下宿先の家に行ってみたら、あんたの家だったから焦ったわ」

そう言う氷華は全くそんな表情ではない。

おそらくは、俺の家に住むってのは本当だろう。

「あんの糞親が」

こんな存在自体が悪魔みたいな奴が住むのわ承認したとは許すまじ。

「まあまあ、良い両親じゃない」

そう言うて氷華が座るのは、俺の斜め後ろで重吾の隣だった。

そして、何も言わなくても分かってしまった。

氷華がいる日常は、それだけで全て非日常に変わってしまうということ。

転校生（後書き）

今日、もう一話投稿予定です。
予定では20時ぐらいに

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

悪魔のこと

いろいろあったが、今日も学校が終わったので、とりあえず家に帰る。

自分の部屋に入って、ひとつの異変に気づく。

「どういづつもりだ？」

「何が？」

氷華を問いたただすが、氷華は何のことか分からないといった表情で返す。

「だ・か・ら、何で俺ん家なんだって言ってんだよ」

「従兄妹だから。他に理由があるとすれば、あんたがあたしのパートナーになるから」

「俺は従兄妹がいたなんて初耳だ。あと、パートナーは嫌だ。」

「まあいろいろ事情のある家庭だからねえ。あと、パートナーは申請しといたから、拒否できないわ」

そついつて氷華は一枚の紙を見せてくる。

コピーみたいだが、発行元は聞いたことない名前の協会なのだ。

「……協会ってことはシスターさん？」

「あたしはシスターじゃなくて悪魔被い、つまりエクソシストの類よ」

「ああ、協会だから悪魔被いね、納得」

「人事みたいに言ってるけど、あんたも悪魔と契約したんだから、所属することが強制的に決まってるんだから」

お前が召喚して、契約させたんだろうと言えば、うるさそうなので黙っておく。

「…ちなみに拒否すれば？」

「『墮天』ってことで殺されるわね」

今、かなり恐ろしいこと言ってるんですけど……。

「天使じゃないのに、『墮天』って何故に？」

よく分からないツッコミをしてる俺も俺だな。

「『墮天』ってことは悪魔に堕ちたってことらしいから、いいんじゃない？」

「まっ、いいか」

そんなことはどうでもいい。それが共通語なら、俺だけ別の呼び方で呼んでも不便なだけだ。

「昨日の…あの人は？」

「あれも堕天。感情を全て悪魔に喰べられてる」

「感情を喰べられる…って何だ？」

氷華が大きくため息をつく。

説明がめんどうなんだろうか。

「悪魔は人の感情や想いなんかを喰べるの。人間は悪魔に餌を与え
る代わりに、悪魔の力を借りてる。でも、悪魔が感情を全て喰べ尽
せば、その人間の肉体を手に入れることができる。悪魔は召喚しな
いと来れないから、体に乗っ取らないと自由に行動できないの。で、
悪魔の力にもよるけど、実態化して自分で行動できる時間はだいた
い10分程度なの」

ここまではいい？と聞いてくるが、理解できても納得はできない…
…。

非日常すぎて、俺じやついていけそうにないです。

「でも、ペケは人がいなかったら10分以上も猫の形態だぞ」

『俺は特別だからな』

ペケが何か言っているが、無視しておこう。

あとでウインナーでもあげれば機嫌はよくなると思うし。

「たぶん、その猫の姿も一つの形態だと思うわ。あたしのフェルも
元はもつと大きいけど、大きくて邪魔だから小さい形態になっ
てるし」

「ペケもデカくなれるのか？」

『なれるけど、疲れるらしいから嫌だ。この方が楽だ』

悪魔つてのはどこまでも自由だな、おい。

「まあ、いいや。でも、ペケはなんで小さくなれるんだ？」

『ん？俺はただ俺が小さい時の体になってるだけだから、特に理由はない』

「普通の悪魔は産まれた時から、ほとんど成体と変わらないんだけどね。体が成長する悪魔は、上位種で、ほとんどんに慣らしていかないと体が耐えられないらしいわ。だから、ペケちゃんもフェルも上位種ってこと」

勝ち誇ったかのような顔で氷華が言ってるので、こっちはスルーしておこう。

「へえ〜ペケって凄かったんだな」

『ずっとそう言ってただろ』

「比較対照がなかったから、凄いのか分からなかったんだよ」

ペケと言い合っていると、氷華が身を乗り出してくる。

「で、あんたはあたしのパートナーになって、一緒に悪魔被いをするの、組まないで殺されるのとどっちがいいの？」

究極の選択だな。

「……ああ、もう分かったよ！やりやいいんだろやりや」

「分かればいいのよ」

「でも、何でお前は今までパートナーがいなかったんだ？」

「……人数の関係上……仕方なかったのよ」

ああ、人数が奇数だったからパートナーを作るに作れなかったのか。何か可愛そうだな……。

友達いるのか気になるが、地雷踏みそうなのでやめておこう。

「まあ、やるのもう決まったからいいとして、街中で戦って見られたらヤバイんじゃないのか？」

「そのへんは大丈夫よ。悪魔を武器形態にしてる時は、自分に悪魔の力が流れてくる。つまり一般人には見えてないから」

「俺は見えたけど、それは何でなんだ？」

氷華は考えこむような仕草をするが、正直キャラ的に似合っていない。

「見えるあんたが異常なの。たぶん、特別な力があるか、運命ね」

氷華と出会う運命だと思つと嫌だなあ。

可愛いけど貧乳だし、状況が俺には荷が重過ぎる。

「何か失礼なこと考えてない？」

「いえ、何も。気のせいではないでしょうか」

「そこまで否定するところが怪しいけど、まあいいわ。とりあえずあんたを鍛えないとね」

鍛えるって何するんだろうか。できれば、楽そうなのでお願いしたい。

「何するんだ？」

「強くなるには、やっぱり、実践が一番」

ということで、と氷華が続け、

「しばらくあたしは見てるから、あんたが墮天を倒しなさい」

嫌だ、そんなの、めんどくさい。

と言おうとすると、氷華が何かを感じたのか、勢いよく右を見る。

「ここから4時の方向に距離は500m。急いで用意しなさい」

用意するものはなかったので、とりあえずペケを指輪にして準備完了。

「行くわよ」

はあ、めんどくさい。

でも、引き受けたししゃあねえか。

悪魔のこと（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7417z/>

雷氷の悪魔祓い

2011年12月25日20時13分発行